

# 幼児期から学童期における子どもの食生活に関する研究

— 箸の持ち方指導を通して —

赤崎 眞弓<sup>\*1</sup>・元田 美智子<sup>\*2</sup>・松野 絵理<sup>\*2</sup>・仁部 直美<sup>\*3</sup>

虎谷 香<sup>\*3</sup>・小瀨 有里子<sup>\*3</sup>・石橋 潤子<sup>\*4</sup>

※1 教育学部 ※2 附属幼稚園 ※3 附属小学校 ※4 附属中学校

## I はじめに

本研究は、2009年度の共同研究（家庭科）「箸の持ち方調査」の成果と課題を受け、継続研究を行ったものをまとめたものである。研究会は2010年6月から2011年1月まで10回開催した。2009年度の附属幼稚園の幼児・附属小学校児童の「箸の持ち方調査」から浮かび上がったことは、幼稚園で箸を正しく持てる幼児はほとんどおらず、小学校低学年でも正しく箸を持てる児童は少ないということである。発達期で捉えてみると、幼児期では鉛筆型になる迄、児童期では鉛筆型から正しい持ち方である伝統型になる迄の移行の困難さが判明した。課題として、発達段階に応じた指導の継続化が残された。

そこで、2010年度は、新たな取り組みの視点として「発達期に応じた箸の使い方の効果的な指導」並びに「箸の持ち方、使い方の習得から派生する食生活全般にかかわる取り組み」を設け、学部と附属幼稚園、附属小学校、附属中学校が連携しながら実践化に向けた研究を行うこととした。

## II 発達期に応じた箸の使い方の効果的な指導

### 1 幼稚園での箸の指導について ～3歳児クラスにおいて～

#### (1) 保護者に理解を求める

○弁当開始に伴い、箸を正しく持つことが、小学校へ向けての鉛筆にぎりにスムーズに繋がるとことについて根拠を基に説明した。

○弁当参観を行い、箸使いや準備、片付け、食べることなどの状況を保護者に把握してもらった。

#### (2) 指導の流れ

5月・・・準備、片付けなどの方法を伝え、全部食べるようにする。

6月・・・準備などに慣れるようにする。全部食べるように励ます。

こぼした時は拾うようにする。

9月・・・箸の正しい持ち方を指導する。

一粒も残さないで食べるようにする。

10月・・・上の箸、下の箸の持ち方について個別に対応する。

11月・・・2本の箸ではさむように指導する。（個別に指導する）

1月・・・使い方に慣れた時点で、箸で物をつかみむ練習をする。

弁当参観＝食育の大切さについて話す。

好き嫌いをしないように、嫌いな物にも挑戦させる。

30分以内で食べるように、適切な量にする。

よくかんで食べるようにする。

2月・・・好き嫌いせず、30分以内で食べるようにする。

3月・・・まとめ



「下の箸はピース握り」



「大豆をつかむ練習」



「お箸上手でしょ」

### (3) 成果と課題

上の箸の持ち方、下の箸の持ち方に分けて、正しい箸の持ち方を明確に指導したことで、子どもが正しい箸の持ち方を理解した。正しい持ち方がわかると意識して正しく持とうとし、上達していった。

さらに、食べこぼしがほとんど無くなり、食べる時間も短くなった。ごはん粒一つ一つを箸でつまんで食べ、残さず食べることで食べ物を大切にする気持ちや感謝の気持ちが育っていった。

これからは、正しい持ち方が確実に定着するように指導を継続していきたい。また、一人一人の育ちに応じた細やかな指導をしていきたいと考える。

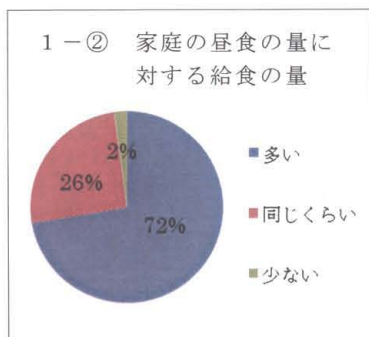
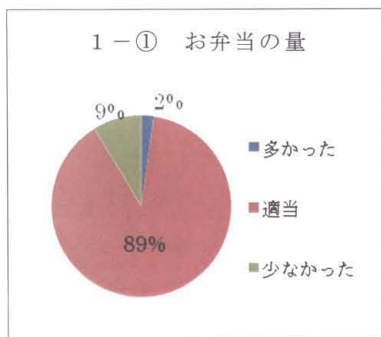
## 2 幼小の接続を踏まえた取り組み（附幼年長児保護者対象）

### (1) 弁当参観と給食試食会

平成22年9月に食事に関するアンケート（回収47名）と給食試食会を実施した。その中で、食事の量に対する考え方に違いが生じていることがわかった。弁当に関しては、弁当の量、弁当を食べ終えるまでの時間について、共に90%の保護者が適当であるとしており、弁当を時間内で完食できるのでよいと回答している。（グラフ1-①）

実際に給食試食会において、1年生の食べている量を見てもらい、子どもが家庭で食べる量と比べると、給食の量が多いと72%の保護者が回答している。（グラフ1-②）

我が子が普段食べている量と給食の量を比べて、「給食時間内に食べられるか」、「全部食べられるか」など不安も生じたようである。



## (2) 講話について

試食会后日、保護者へ講話を実施した。内容については、以下の通りである。

- 1) 配膳について
- 2) 食事時間・様子について
- 3) 味覚について

給食時間の子どもたちの様子を、写真を交えながら話をしていくと、給食に対する不安も少なくなったようである。保護者の感想の中には、「試食会を体験させていただき、給食に対する不安はかなり解消されました。」「あと半年あるので、家庭でも少しずつ声かけをしていきたいと思います。」など、担任とのかかわり、6年生とのかかわり、友達とのかかわりによって子どもたちの成長する様子がわかり、励みや期待へと変わっていったようだ。

## (3) 成果と課題

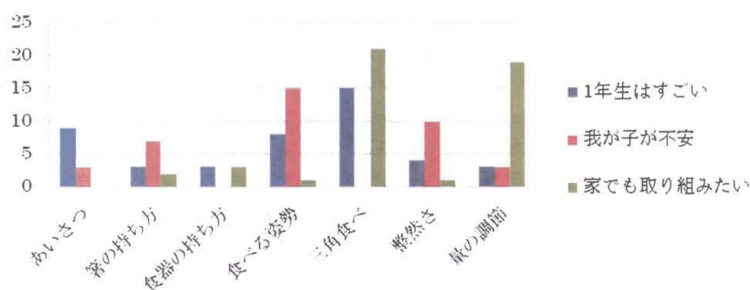
年長児保護者に対する弁当参観と給食参観、及び給食試食会を行った結果、以下のような成果が見られた。

グラフ2-①、②から食べるだけでなく、つぎ方、食べる姿勢、三角食べなどの準備や食べ方について、「我が子ができるか不安」「家でも取り組みたい」と感じている保護者もいる。

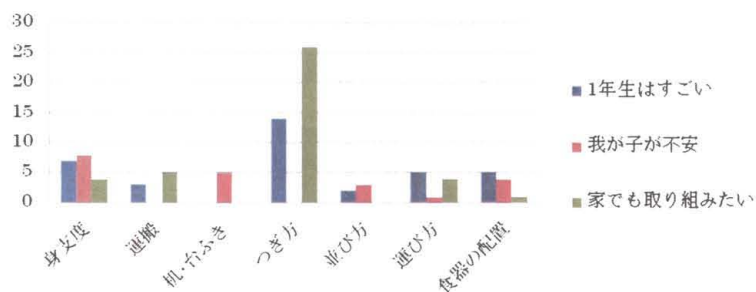
つまり、我が子の実態と1年後の我が子の姿とを比較することで我が子の課題が分かり、目標をもつことができるかと考えられる。また、グラフ3からも分かるように、100%の保護者が給食試食会をしてよかったと感じている。

このように、保護者が実際に給食の様子を見たり、給食を食べたりしたことで保護者自身が子どもの実態を把握できたことが成果と言えよう。

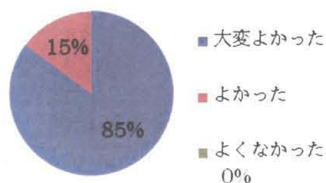
## 2-① 給食の様子について



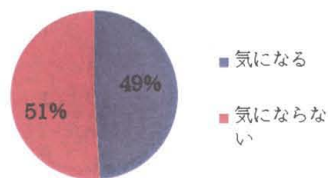
## 2-② 給食の配膳の様子について



## 3 給食試食会の実施について



## 4 箸の使い方について



しかし、我が子の箸の持ち方については、グラフ4のように「気になる」と回答した保護者が半数程度おり、幼稚園だけの箸の指導ではなく、小学校でも箸の指導を継続していくことが必要ではないかと考える。

また、年長児に対しても給食試食会を実施することは、子ども自身に安心感や目標をもたせることに繋がり、よい結果が生まれるのではないかと考える。今後、実施に向けて検討していきたいと考える。

### 3 第1学年における授業の取り組み

#### (1) 箸の持ち方の実態










平成22年11月に、箸の持ち方の実態調査を実施した。調査対象は、1年生98名(男子49名、女子49名)である。調査方法は、子どもたちが給食を食べている際に、子どもの箸の持ち方を一人ずつ確認し、以下の分類に従って分析した。

#### 【 箸の持ち方の分類 】

型	箸の持ち方
①	親指、人差し指、中指、薬指、小指の5本の指で握り込む。
②	親指、人差し指、中指、薬指の4本の指で握り込む。
③	鉛筆を持つように、親指、人差し指、中指の3本の指で持つ。(鉛筆型)
④	親指、人差し指、中指、薬指の4本を使うが、上の箸が動かさず、食べ物をすくう。
⑤	親指、人差し指、中指、薬指の4本で持ち、正しく使う。(伝統型)

※それぞれの持ち方で、2本の箸が交差している場合は、さらにX(クロス)と付け加える。

#### 【 調査結果 】

①	②	③(鉛筆型)	④	⑤(伝統型)
				
0人	13人	35人	16人	14人
①X	②X	③X	④X	
				
0人	4人	14人	2人	

調査結果から、⑤の正しい持ち方で使っている子どもが少ないことがわかる。また、多くの子どもたちが、幼少期に多く見られる①の持ち方から③の鉛筆型まで移行してきている理由として、食器具をスプーンやフォークから箸を使うようになってくることや、文字を書くようになり、鉛筆の使用頻度も高くなっていることも影響しているのではないかと考えられる。②から③、③から④、⑤へとス

テップアップしてきているようだが、子どもたちの食べている様子を見てみると、指を動かすという動作が難しいようであった。

(2) 指導について ※別紙指導案参照

(3) 授業を終えて

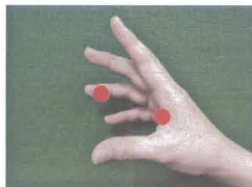
振り返りの時に、子どもたちから、「自分の箸の持ち方が、正しくなかったということがわかった。」「箸の動かし方がわかった。」「家に帰ってからでも練習をしたい。」などの感想が聞かれた。子どもたちの感想から、正しい箸の持ち方を知る機会をつくる必要があると感じた。

持ち方の練習を通して、最初に、指と箸が当たる部分がどこかを明確に提示(資料1, 2)することが、子どもたちにとって正しい箸の持ち方を理解しやすいということがわかった。

(資料1)



(資料2)



● 下の箸が当たる位置  
■ 上の箸が当たる位置

(資料3)



1回目に授業を行った時には、資料3のように、箸が当たる位置を説明し、上の箸と下の箸の両方とも赤い印をつけた。この説明では、箸の当たる位置が子どもたちに伝わりにくく、箸を持つのに時間がかかった。

次に授業を行った時には、資料4, 5を用いたが、上の箸と下の箸の両方とも赤い印をつけたため、上の箸と下の箸が当たる位置が混同して、分からなくなった子どもがいた。

(資料4)



(資料5)



これらの反省を踏まえて、資料1, 2のような持ち方を掲示したところ、子どもたちだけでも練習にスムーズに取り組むことができた。

しかし、箸を持つ手の写真だけでは、同じ形にするのが難しいようだった。



今回の指導では、手順（資料6，7，8）を示し、上と下の箸を別々に練習する手立てをとった。



（資料6）



（資料7）



（資料8）

別々に練習することで、それぞれの箸を持つときのポイントが明確になる。それぞれの箸の持ち方を十分に練習することで、2本同時に持ったときの動きは理解しやすいようであるが、子どもたちにとっては、下の箸では動かないように固定すること、上の箸では箸の先を上下に動かすことなど、ポイントとなる動きが難しいようであった。個々に応じた指導が継続し必要である。



実際に物をつかむ練習の場面では、熱心につかむ練習をする子どもがいる一方で、箸がうまく動かせず、元の持ち方に戻る子も見られた。常に声をかけて指導し、あきらめずに取り組ませることが大切である。このような練習は、箸の持ち方・使い方の改善に繋がるだけでなく、集中力、根気強さなどの精神面での強化へも期待できると考える。

短い時間の中で、③、④から⑤の正しい持ち方をできるようになった子どもがいる。指を置く位置や動かし方、力の入れ方などのポイントがわかることで、持ち方が改善されたのである。

指導を行う前は、給食時間の教室で、箸の持ち方についての話題はなかったが、指導後は、給食時間に栄養教諭の姿を見つけると、箸の持ち方を確認してくる子どもが増えた。これは、子どもたちの箸の持ち方への関心・意欲が高まったからであると言える。

また、指導後には箸の指導を行ったことや箸の持ち方の手順を保護者へ知らせた。すぐに練習に取り組んだ家庭もあり、学校と家庭とが共に連携して指導を行うことで、さらに効果が高まると考えられる。正しく箸を持てるようになった子どもには、名人シールを配布している。できたことが目に見え、認められることで、自信へと繋がっていく。子どもたち全員が、正しく箸を持てるようになるには時間を要するが、今後も継続して給食時間に指導を行っていきたい。

### Ⅲ 箸の持ち方、使い方の習得から派生する食生活全般にかかわる取り組み

#### 1 第6学年における取り組み

##### （1）修学旅行事前保健指導での取り組み

平成22年9月に、附属小学校6年生110名を対象に、修学旅行事前保健指導の

中で「箸の正しい持ち方」の指導を実施した。

### 1) 児童の実態

6年生児童は、給食指導において、配膳、準備、片付けなどについてはほぼ身に付いてきている。しかし、ほとんどの子どもたちは、正しい箸の持ち方ができていない。6年生に対しては、これまでに正しい箸の持ち方の指導を行う機会が限られていた。

### 2) 指導内容

日本と韓国における食事マナーと、箸とスプーンの持ち方について指導を実施した。

指導者： 養護教諭 (T1) ， 保健主事 (T2)

#### ① 一般的な食事マナー

<韓国での食事マナー>

- ・最初に汁物を一口食べる。
- ・食器などを手で持たない。
- ・スプーン、箸の順に右側に並べて置く。
- ・おかずやご飯は端から食べる。
- ・食事後は茶碗にスンニョン（白湯）を注いできれいにする。
- ・ご飯、キムチ、汁物はスプーンで食べる

<日本及び韓国の共通する食事マナー>

- ・スプーンなどを器に当てて音を立てないようにする。
- ・ご飯は左、汁物は右、小皿は中央に置く。
- ・手でつまみ食いをしない。
- ・スプーンと箸を同時に使わない。
- ・食事中、席を立たない。
- ・食べ物を噛む時に音をたてない。

#### ② 箸とスプーンの持ち方

<箸>

- ・下の箸を親指の下にはさみ、薬指につけて握る。
- ・上の箸を人差し指と中指の間にはさみ、親指で押さえ上下に動かす。
- ・箸を親指で軽くはさみ、人差し指と中指を使い、上の箸を動かす。



正しい持ち方



間違った持ち方



### <スプーン>

- ・日本で使っている物と同じように鉛筆を握るように軽く持つ。
- ・箸とスプーンを同時に持ったり、4本の指で握り込んだりしない。



間違った持ち方

正しい持ち方

(※ 資料「韓国での食事マナー」 [www.lifeinkorea.com/Food/f-mannersj.cfm](http://www.lifeinkorea.com/Food/f-mannersj.cfm) より)

### 3) 成果と課題

最初に養護教諭が「皆さん、箸は正しく持てますか。」と尋ねた際、「ちゃんと持てない。」「自信がない。」という子どもからの反応も多く、正しく箸を持っていないことを認識できている様子が伺えた。実際に、何人かの子どもに持ってもらったところ、正しい持ち方をしていた子どもは少なかった。しかし、子どもたちにはそれを正しく直そうという意識は低く、今回改めて箸の持ち方について指導を行ったことにより、箸の持ち方を見直す機会になったと考える。

今回の取り組みを通し、高学年でも正しい箸の持ち方の指導を行うことの必要性を強く感じた。今後は、実態調査を行い、十分な指導時間を確保することで、全ての子どもたちの意識を高め、正しい箸の持ち方の改善へ繋げることができると考える。

## 2 学校保健委員会での取り組み

平成22年11月に、育友会会長をはじめ、学年委員長・保健体育委員・本校職員を対象に、学校保健委員会を実施した。これまで「食育」をテーマに取り組んできた。今年度は継続して取り組む内容とともに「正しい箸の持ち方(家庭科の研究内容)」について幼稚園・小学校・中学校が連携して取り組んでいる様子を紹介した。

テーマ『食生活(食行動)と健康課題』～咀嚼何回噛んでいますか?～

### (1) もりもりカードについて

小学校では、学校保健委員会の取り組みとして、6月と11月の2回「もりもりカード」を全児童に配布し、記入してもらった。

〈 集計結果より 〉

- 全学年ほとんど全員が、朝ごはんを食べて登校している。
- 学年が上がるほど、就寝時刻が遅くなる傾向がある。

〈 保護者による「もりもりカード」に関する協議 〉

- 摂取カロリーは、朝、昼、晩の3食に差が少ないことが望ましい。
- 給食は、中学年に標準を合わせている。(約 650kcal)
- 睡眠時間：日本 7時間半 フランス 10時間

(2) 西門先生の話について

にしかど歯科医院 西門 忍先生(長崎県歯科医師会 地域保健委員会副会長)を講師として迎え、下記のような内容を話された。

- 1) 咬合回数と食事時間の調査を長崎県内で2校実施した。  
(大村市内の小学校・附小)
- 2) 噛ミング30(サンマル)普及徹底事業について
- 3) 噛むことで脳を刺激することとなり、成績アップへつながる。
- 4) 1口30回噛んで欲しい。
- 5) 家庭の食事やお弁当にも固い食材を取り入れて欲しい。
- 6) 朝は難しいけれど、ゆっくりした時間を作ることが大切である。
- 7) 早食いになると、よく噛まない上に、一口の量も多くなる。
- 8) 野菜料理を取り入れることで、メニューのレパートリーが増える。
- 9) 成人期になって早食いの習慣を変えることは難しいことである。

(3) 附属養護教諭部会で話し合ったこと

附属4校の養護教諭部会の中で以下のような内容が挙げられた。

○幼稚園

赤ちゃん言葉を話す園児が一部に残っている。その原因の一つとして、前歯の噛む力が弱いことが挙げられた。

○小学校

う歯の治療率が高かった。しかし、給食時間の様子では、「噛めない・噛まない」「飲み込むことが上手にできない」という一面がある。

○中学校

食事時間の短さが気になるものの、う歯罹患率は低く、肥満傾向の生徒も少ない。

○特別支援学校

食べものを丸飲みする子どもたちが多い傾向にある。

学校歯科校医(矯正担当)によると「最近、噛めない・噛まない子どもが10～20年前より1割増えている。要因として、生活習慣の変化・口腔の機能の低下・歯の生え替わりの時期など環境の影響が大きい」と考えられている。

#### (4)咬合測定について

長崎大学病院の福田先生から咬合測定の調査依頼があった。歯学部と工学部が共同研究した測定器を6年生全員が装着し、咬合測定を行った。測定の結果、一人あたり1食1000回ほど噛んでいることがわかった。

#### (5)まとめ

もりもりカードの良さは、朝食摂取状況・おおまかな食事内容・就寝時刻・排便の有無などが把握できる点である。

西門先生の講話を通して、保護者が「よく噛むことの必要性を我が子に教えていきたい。」と認識できたことは、とても意義深いことだと感じた。

今年度末には、長崎大学歯学部研究チームより、咬合測定の分析結果が届く予定である。その結果をもとに、箸の持ち方からはじまる食事作法・食行動(咀嚼)・食育へとつなげ、附属4校の先生方と連携しながら食育の輪を広げたい。また、箸の正しい持ち方についての研究を学校保健分野の中で、どんなアプローチが効果的で可能なのか挑戦していきたい。

## IV おわりに

幼稚園年少クラス、小学校1年生のクラスでの箸の持ち方の指導を通して、多くの子どもたちが、箸の持ち方への関心を高め、意欲的な取り組みを行うようになりつつある。顕著なのは、年少クラスでの取り組みである。1年間にわたり担任による指導と家庭との連携の結果、クラスのほとんどの子どもたちが鉛筆型の持ち方ができるようになったことである。小学校においても第1学年の特別活動(学級活動)においてクラス担任と栄養教諭とのティーム・ティーチングによる指導で箸の持ち方への関心とともに意欲も高まりを見せつつある。しかし、練習を行ってもなかなか成果が現れず、途中で停滞する子ども中にはいる。子どもたち一人一人の進み具合を把握し、わずかな進歩も見逃さず子どもたちを賞賛しながら、意欲を高めていくことが必要である。また、鉛筆型から伝統的な箸の持ち方の定着に向けてモデルとなる教師の箸使いについても今後検討したい。クラスの子どもたちは、教師の箸使いを見ながら、自分の箸の持ち方のどこに問題があるのか確かめながら、箸の持ち方を変えていくものとする。更に、伝統的な正しい持ち方ができるようになった子どもたちを核としながらクラス全体へのひろがりに繋がるものと捉えている。

また、幼小の接続を踏まえた取り組みとして行った幼稚園年長児保護者による我が子の弁当参観と小学校給食の試食を通して、「量」についての認識の差が明白になった。弁当と比較して給食の「量」がはるかに多いと感じた保護者が多くいた。幼稚園の生活は9時登園し11時半には弁当を食べるに対し、小学校では8時頃に登校した後、4時間の授業終了後給食の配膳をし、食べるのは12時半近くになってしまう。子どもの活動の時間を考えると当然のことであるが、試食会を

通して幼稚園での生活と小学校での生活の違いを改めて考えるいい機会になった。幼小の滑らかな接続の一端について、保護者とともに考えることができたことは、とても有効であった。

更に、小学校6年生の韓国への修学旅行事前保健指導の中で「箸の正しい使い方」や「日本と韓国の食事マナー」について触れている。

このような、様々な取り組みを展開したものの、正しい箸の持ち方の指導についての成果はまだまだ十分とはいえない状況である。今後の課題として、家庭との連携強化はもとより、幼稚園、小学校全職員が「箸の正しい使い方」の効果的な指導方法について共通理解を図り、系統的な指導を続けることが必要であると考えている。残された課題についての取り組みを、次年度一層深めることを協同研究のメンバー全員が認識しているところである。

## 第1学年 学級活動学習指導案

長崎大学教育学部附属小学校

指導者 教 諭 長田 誠

栄養教諭 小濱 有里子

- 1 日時 平成22年12月9日(木) 第4校時
- 2 場所 1年1組教室
- 3 対象 男子15名 女子15名 合計30名
- 4 題材 「箸の正しい持ち方・使い方を知る」
- 5 題材設定理由

### (1) 題材について

箸という道具は、毎日の食事には欠かせないものである。「つかむ」「はさむ」「はがす」「さく」「切る」「すくう」「まぜる」など、たくさんの機能をもっている。箸を使うことは、手指の発達や、手先の器用さを促し、脳への刺激にもつながると考えられている。

近年、箸を正しく持てない人が多くなっていると言われている。箸の持ち方は、子どもだけの問題ではない。大人になったからといって箸の持ち方が改善されるわけではなく、子どものころからくり返し練習し、正しい箸の持ち方を身に付けることが必要である。

### (2) 児童の実態

多くの子どもたちは、苦手な食べ物も食べられるようになってきており、給食時間内にも食べ終わることができるようになってきた。準備においては、無言配膳に取り組み、準備にかかる時間も短くなってきた。

たくさん「できること」が増えてきている子どもたちだが、箸の持ち方に関しては、正しく持って使っている子が少ないことが気になっている。茶碗にごはん粒を残さず食べたり、お椀やお皿に食べ物が残らないように食べているが、箸でうまくつかめず、最終的に手を使って食べている姿を見掛ける。

### (3) 教師のかかわり

○正しい箸の持ち方をするので、物をしっかりとつかむことができるということを確認し、箸を正しく持って使いたいという意欲をもつことができるようにする。

○上の箸、下の箸を別々に練習して、段階別に箸の持ち方を練習する場を設定する。

## 6 本時の学習

### (1) 本時のねらい

- 箸の正しい持ち方を知る。
- 箸を正しく持って使おうとする。

## (2) 展開

課程	子どもの取り組み	教師のかかわり	時間
つ か む	<p>1 教師の動きが見えやすいところに移動して、動作を観察する。</p> <p>教師による箸の使い方の例示を見ることで、本時では、箸のことについて学習するということを知る。</p>	<p>学習材 1</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・箸</li> <li>・皿</li> <li>・サイコロ</li> </ul> </div> <p>○ 教師（担任）が、箸を正しくない持ち方で使い、物（どの面からも、均等に力が入りやすいサイコロ）をつかもうとする。</p> <p>（うまくつかめない様子や箸と一緒に手も使おうとする様子）</p>	
	<p>2 うまく物をつかめないことには、理由があると想像し、その理由を考える。</p>	<p>○ なぜ物がかめなかったのか、考えていくようにする。</p>	10
	<p>3 どうやったら物をつかむことができるか考える。</p>	<p>○ どうやったら、物をつかむことができるのか考えていくようにする。</p>	
	<p>4 箸を正しく持つ理由を知り、本時のめあてを意識する。</p>	<p>学習材 2</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文カード</li> </ul> </div> <p>○ 箸を正しく持つ理由を伝え、めあてにつなげていくようにする。</p>	
	<p>5 箸の持ち方について段階別に練習をする。</p>	<p>学習材 3</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・練習手順を示した写真</li> <li>・箸</li> </ul> </div> <p>○ 練習の仕方を提示する。</p> <p><b>A</b> 下の箸を持ち、薬指と親指の付け根で固定する。（箸止めピース）</p>	

はしのつかいかたの名人をめざそう



展 開	隣の席の友達とペアになり、できているか確認しながら練習をする。	<p>○ B上の箸を、3本の指で鉛筆の持ち方と同じように持つ。</p> <p>○ C上の箸と下の箸をA, Bのようにして一緒に持つ。</p> <p>※教師は、子どもたちの箸の持ち方を見ながら個別に指導していく。</p>	20
	<p>6 実際に箸を動かし、物をつかむ練習をする。</p>	<p>学習材 4</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 箸</li> <li>・ お茶碗</li> <li>・ サイコロ</li> </ul> </div> <p>○ 箸を正しく持つことを意識できるようになったら実際に物（どの面からも均等に力が入りやすいサイコロ）を使ってつかむ動作の練習をする。</p> <p>※つかむことに夢中になって、箸の持ち方が元に戻らないよう注意をする。</p>	10
／ ま と め	<p>7 本時を振り返り、感想を発表する。</p> <p>（これからの食事（給食）時間に、意識して取り組みたいことなど）</p>	<p>○ 本時で学習したことを、これからの食事（給食）の時間で取り組んでいくことが意識できるようにする。</p> <p>※給食時間、箸の持ち方を見て回り、正しく持つことができる子には名人シールを配る。</p>	5

## 8 評価

箸の正しい持ち方を知り、正しく持って使おうと意欲をもつことができたか。